

## 『生写朝顔話』

天保三年（一八三二）一月大坂稻荷境内芝居で初演され、十八年後の嘉永三年（一八五〇）に至って、山田案山子遺稿・翠松園主人校補『増補／生写朝顔話』として丸本が出ましたが、天保三年の番付とは段の配置が違います。五段目として番付にある「駒沢閑居」「山岡屋舗」「多々羅村」が、本当に上演されたのか否かを含めて、成立については諸説があります（『朝顔日記』の演劇史的研究』参照）。

司馬芝叟の長咄の会で披露された「薺」が原拠とされますが、内容は伝わっていません。読本に『朝顔日記』があり、これが中国の戯曲「桃花扇」に拠るとされています。読本から歌舞伎化されて「けいせい筑紫<sup>つまごと</sup>★（琴+夫）」として上方歌舞伎の当たり狂言となり、これらすべてを踏まえての人形浄瑠璃化です。全五段の全体は大内家のお家騒動を背景に持っています（国立劇場では昭和五十三（一九七八）年五月に三段目切の「摩耶ヶ嶽の段」を含む全通しを試みています）が、物語の主軸は皮肉な運命にも関わらず純愛を貫く深雪と阿曾次郎の恋物語で、菊田一夫『君の名は』と並ぶすれ違いロマンスの代表格です。

宇治の蛍狩りで秋月弓之助の娘深雪と結ばれた宮城阿曾次郎は、「露のひぬ間の朝顔に、照らす日かげのつれなきに、哀れ一むら雨のはらはらと降れかし」との唱歌を深雪の扇にしたためます。秋月家が芸州への帰国の途次、明石で再開した二人は出船のために再び別れ別れとなり、深雪は朝顔の唱歌の扇を阿曾次郎に託します。深雪には、大内家の家臣駒沢次郎左衛門との縁談が起り、これを嫌った深雪は家出をしますが、実は駒沢次郎左衛門こそ、駒沢の家を継いだ阿曾次郎その人。そうと知らぬ深雪は流浪の果てに盲目の乞食の身となります。嶋田宿の戎屋徳右衛門方に、岩代多喜太と共に投宿した駒沢は、朝顔の歌で評判の瞽女を招き、それが深雪であることを知りますが、岩代の手前、名乗ることができず、朝顔の扇と眼病の薬を徳右衛門に託して旅立ちます。駒沢が阿曾次郎であったことを知った深雪は、あわてて後を追いかけますが、大井川の川止めに阻まれてしまいます。やがて徳右衛門が秋月家ゆかりの者とわかり、甲子の年の生き血と薬の配合によって、深雪の盲目も快癒することになります。

宇治で交わされた朝顔の唱歌が、再びみたび恋人たちの再開の種となる趣向の妙。クライマックスの「宿屋」で、呼び出された朝顔こと深雪の、音曲によそえた身の上を聞く善悪二人という構図は、「阿古屋琴責」を想起させる場面です。問われるままの身の上話。隙あらば落ち度を狙う岩代らの手前、名乗ることのできない駒沢が、初めて事情を知る悲哀の深さ。

駒沢が種々の品を徳右衛門に託しますが、岩代一味の策謀によって悪漢笹久蔵が駒沢暗殺を狙い、駒沢が鮮やかな手並みで首を刎ねるという件が、昭和四十年代以降カットされるようになり、表面上淡々とした運びの末に、段

切れ近くに至って、駒沢こそ阿曾次郎と知った深雪の激情が際立つという構成になっています。

嶋田宿は藤枝と金谷の間にあり、大井川の東岸側。またもすれ違いの運命に阻まれた深雪の運命を打開するのが、「浜松小屋の段」で悪人に殺された乳母の浅香が、夢枕に立って奴関助が現れたこと。さらには浅香の父が徳右衛門と知れること、そして徳右衛門こそが駒沢の秘薬を活かす甲子の年出生の生血の保有者であることなどで、来たるべき将来のハッピーエンドを予感させて終幕となります。

(児玉竜一)